



彼女たちの靴の匂い——
夜のオフィスで秘密のケン活

隙間売ト 作

R18

彼女たちの靴の匂い――夜のオフィスで秘密のクン活

隙間売ト
作

プロローグ

「ふう……」

何にも代えがたいほど充実した気持ちで、深く息を吐き出しながら、中村精矢は顔を上げた。

彼は、すでにひとけのなくなった夜のオフィスで、まったく同じ姿勢を保っていた。

床に膝をつき、デスク下に這いつくばるようにして、若い女性社員が上履きとして使用しているオフィスサンダルの中に鼻を近づけていたのだ。

「ついにやってしまった」

鼻を刺すような、生々しい、酸っぱいような、汗の匂い。

うなじや耳の後ろ、鎖骨付近などとはおそらくまったく異なる環境で醸成される匂い。

そして二つの足の匂いさえ微妙に異なることを発見する。

右の方が匂うな……。

この行為がノーマルな行為ではないことは理解している。いつかバレてしまうかもしれない恐怖もある。それでも……やめられない。

「もう少しだけ……」

雨が多い時期の靴に特有の匂いがする。

そうしているうちに梅雨時の季節の夜は更けていく。

◇

◇

◇

二カ月前。

人気スポーツシューズメーカー『ザ・モメント』に所属する三十八歳の中村精矢は、四月から物流部門、つまり倉庫からE C事業部へ異動となった。

E C事業部付課長というのが彼の新しい肩書だった。

物流拠点である栃木県の倉庫では思わぬ長い下積みとなってしまうた。

目立った資格も特技もなく、ルックスも凡庸。

一流大学卒でもない彼は、アパレル業界、その中でも『ザ・モーメント』のような老舗で、しかも、人気のスポーツシューズメーカーでは、目立たない存在だった。

精矢は、当初の配属先となった栃木県のある場所にある物流センターを初めて訪れたとき、「ペンペン草しか生えない場所だなあ」とある意味感動したものだ。

それ以来、ずっと倉庫勤務。

倉庫勤務のまま、係長の肩書が付いた。

堅実な性格で、目立った成果もないが、失敗も少ない。それが周囲の精矢に対する評価だった。

精矢自身としては、このまま定年まで物流センター勤務だと思っていた。

「そうになったら永遠に『倉庫番』だな」

大昔に流行ったコンピュータゲームのタイトルを思い出して、精矢はそう自嘲していた。

物流センターに勤務してすぐに精矢は地元の女性と出会い、若くして結婚した。そして程なく一女をもうけた。その子はいま中学生だ。

異動のきっかけは、前任者の退職と、会社の事情だった。

まず、前任の課長が同業他社に、キャリア転職してしまった。続いては、会社の事情だ。

各部署に分散していた機能を集約し、EC事業部という独立した事業部を三年前に発足させた経緯もあった。

倉庫の経験の長い精矢であれば、物流の経験が生きるはずであった。堅実で失敗の少ない彼に白羽の矢が立った。

「どうして本社採用なのに中村君だけがあんなに長く地方勤務だったのだ。彼はローテーションから外れているのか？」

ある役員が言ったそうだ。

地方の物流センターでの長すぎた勤務も、本社異動への要因となった。

そして精矢は慣れ親しんだ栃木の倉庫をあとにし、東京の、本社の土を踏む。

第一章 異動

男ばかりの倉庫から、女性比率の高い本社の、クリエイティブなEC事業部への異動。

中村精矢は三十八歳になって初めての本社勤務に戸惑いを隠せなかった。

「今日からよろしくお願いします」

初出社の朝、オフィスに入るなり彼は背筋を伸ばしたまま一礼した。周りのデスクには若いスタッフたち。

皆が立ち上がって新任課長を迎える。女性社員の比率が高い部署は、これまでの会社員生活では初めてだった。

「あっ、はじめまして！ 中村課長！」

最初に明るく声をかけてきたのは課長補佐の中条綾子（なかじょうあやこ）。年齢はだいたい三十五歳くらいに見える。身長は百六十五センチくらいありそうだ。

やや骨太な体格で、清楚な白いブラウスに包まれた胸部がこんもりと盛り上がっている。体格の良さと胸の大きさが包容力を感じさせる。

これはなかなか！ けっこうボリュームがあるじゃないか……。

性癖が不意に顔を出す。

パイズリできるんじゃないか？ いや、いかんいかん、俺は部下をなんて目で

見てるんだ……！

グラビアアイドル上がりの女優のような存在感のある顔立ち。奥二重の瞼と丸い鼻が特徴で少し高飛車な笑顔が魅力的だった。

「早速ですが、月曜朝は定例のミーティングです。中村課長も今日から参加をお願いします。慣れたら課長が会議を回してくださいね。では、行きましょう」

会議室に案内されると、そこにはすでに二十名ほどのスタッフが座っていた。いずれも二十代、三十代の精鋭揃いといった風情で、半数以上が女性たちだった。皆、いかにも仕事もプライベートも充実していそうだった。

前までいた倉庫と全然違うな。

これまで働いていた倉庫の事務所で、後輩社員が剃り残しの長い髭を抜いている光景を思い出した。

「みんな、今日は新しい課長さんを紹介するわ。中村課長。物流センターの経験がとても長い方なの」

自己紹介を求められ、精矢は立ち上がった。

「中村精矢と申します」

中村は普通の中村。にんべんがつかない方。精の精は「精力的に働く」などの「精」、「矢」は「アロー」の「矢」。そう説明した。

「十五年間物流方面で、出荷や返品、在庫管理に関わる仕事をしてきました。E Cの分野でも皆さんのお役に立てるよう頑張ります」

「精矢」の「精」は「精液」の「精」です、って自己紹介したら初日にして俺は終わるな……。

挨拶をしながら精矢はそんな物騒なことを考えていた。

自己紹介の挨拶が終わると、会議室に拍手が響く。

精矢は若いメンバーからの興味本位のさまざまなタイプの視線に気づいた。ニコニコしている者や、表情の読めない者、中にはやや怪訝な表情を浮かべている者もいる。

「じゃあ、今週の個々のスケジュールについて発表してもらいましょうか」
課長補佐の中条綾子は周囲の社員の顔を見渡してから言った。

「まず神崎さんから」

中条に促され、神崎と呼ばれた若い女性が口を開く。

「今週は、調査会社からの二月のデータをもとにしたレポートをまとめます。それと三月の速報値が出れば、その対応に取り掛かる予定です」

まだかなり若いのに、しっかりした人だな。中堅みみたいな安定感だ。

こういう人材も倉庫にはいなかった。おまけに綺麗な顔立ちをしている。精矢は感心した。

その夜、精矢を囲んで、オフィスからほど近いダイニングバーで歓迎会が開かれた。

落ち着いた照明が照らす瀟洒な雰囲気。壁一面のガラス窓からは都会の夜景が見え、柔らかなジャズのBGMが流れていた。皆が囲む大きなテーブルには、グラスや皿、ナイフやフォーク、スプーンが規則正しく並べられている。

精矢が任されたEC事業部は総勢二十三名の部署だが、参加者は四十名近い。部署内だけでなく、関連部署にも声かけられ、仕事上の接点の多い他部署の社員も多数参加していた。

精矢の隣に腰を下ろしたのは課長補佐の中条綾子だ。
グラビア写真を思わせる豊満な体躯が、黒いタイトスカートから伸びる脚を見せつけるように組まれる。

「なんかお洒落な店ですね。いつも歓迎会や懇親会は、だいたいこういう店でやるんですか？」

「そうですね。やっぱり若い社員が多いってこともあって、居酒屋とかよりはこういう店の方が喜ばれますし」

「それと、今回は、課長の歓迎会なので、懇親会費として、一人五千円まで補助が出ています。執行役員以上の承認が必要ですが、年に二回までは、福利厚生の一環で認められるんです」

本社の福利厚生は手厚いのだな。精矢は思った。

「そういう決まりがあるんだ……」

「それに、うちは会社としての忘年会がないので、こういう時にみんな集まるっていう感じで」

「倉庫にいたときには知らなかったよ」

「だから……」

中条綾子が続ける。

「せっかくの機会だし、おいしいものが食べられる店で開きたいじゃないですか」
「そうだよね」

「じゃあいきますよ。課長、飲み物は何にします？　ビール？」
「ビールでお願いします」

一皿目の皿が各自の場所へ運ばれてくる。

「アンティパストは、真鶴で採れたメジナを使ったカルパッチョ・アランチャ風味です」

店員が説明してくれるが、精矢はそれが何を意味するのかわからない。さすがに、メジナは知っているが。

「オレンジ風味のドレッシングで仕上げています」

さらにわからない。真っ白なプレートに美しく盛り付けられ、オレンジ色のソースがかかっている。

「このお店って、オーナーシェフがイタリアのジェノバで修行してきた方で、フレンチとイタリアンがベースになって、本格的な料理が食べられるんで、都内でも知られているお店なんですよ」

ジェノバってどこだっけ？ 上の方？ 下の方？

精矢はイタリアの地図を思い描いてみたが、ジェノバの正しい場所はわからなかった。

ハートランドのビールが運ばれてくる。

「さ、課長！ どうぞ」

キリンやサッポロじゃないんだな。さすが東京。本社。

中条綾子がビールを注いでくれる。グラマラスで迫力のある体格なのに、その動きはどこか品がある。

「ありがとうございます」

精矢は恐縮しながらグラスを受け取った。

全員の飲み物が揃ったところで、精矢の歓迎会が始まる。

「倉庫一筋の私がEC事業部で役に立てるか不安ですが、皆様の知恵を借りながら頑張りたいと思います」

「では、乾杯！」

「かんぱーい！」

よく通る高い声上がる。精矢の目の前に座る若い女性社員が明るく声を上げる。

女性のショートボブの髪が揺れ、笑顔が溢れる。精矢が自己紹介すると、彼女は「高木陽菜（たかきひな）です」と言った。

活発な雰囲気、三十歳にはまだなっていないと思われるが、どうなのだろう。

「たかぎさん、よろしく！」

「かちより。『たかぎ』じゃなくて『たかき』ですって！」

「あっ、ごめん……」

「全然いいですけどね！ 『たかき』って普通思わないですよね」

「本当にごめん」

「いいんですー。ややこしい読み方がいけないんですよ。改名してもいいくらい、面倒なんです。いつも」

「高木さんは確かカスタマーサポートの担当だったよね」

「ありがとうございます！ もう担当覚えてくれてるんですね！」

「中条さんから一通りレクチャーを受けたし、一応、これで給料もらっている身だから」

「すっごい。やりますねー」

高木陽菜は素直に驚いていた。

「自家製バーニャカウダです」

アンティパストの二皿目が運ばれてくる。

バーニャカウダって何だ？　なんかゲームに出てくる魔王みたいな名前なんだが。何語だ？

店員が事細かに説明してくれるが、精矢の耳を右から左へ通り抜けていく。

「このお店、前菜が二品続くんですよ」

二品続くことが珍しいのかもよくわからない。

「前菜が続くのって、お酒にも合いますし、いいと思いませんか？　だから飲みすぎちゃうんですけど」

中条綾子はこの店をとても気に入っているようだった。

高木陽菜はすでに二杯目のビールを空けていた。

「えっ？　もう三杯目に行くの？　ペース早くない？　月曜日だけど今週大丈夫？」

高木の横の女性が口を挟む。今朝のミーティングで最初に発言を求められた女性だ。

確か神崎さんって言ってた気がする。

ピンク色のリップがとても似合っている。きれいな顔立ちをしているのどこか親しみやすい雰囲気的女性だ。

「大丈夫大丈夫。全然酔ってないから」

高木陽菜が反論する。

「酔ってないって言う人がいちばん危ないんだから」

すぐさま反論に対する反論。

神崎さんの年齢はおそらく二十代半ば。高木陽菜と同じくらいだろうか。

「神崎美月（かんざきみづき）です」

「よろしく。神崎さんはMDグループだっけ？」

「そうですそうです！ やっぱ私の担当もご存じなんですネ」

神崎美月も、高木陽菜のように驚いて見せる。

「中条さんから業務分掌のレクチャーは受けたからね」

一通り、説明を受けたのだ。自分の立場としては、これから業務を把握し、マネジメントをしていかなければならない。そんなことは倉庫でも実際にやったことないのだが。

「全部が大事な部署だけど、とくにMDは経験もいるしいろいろなところに目を光らせないといけないから大変だよネ」

「毎日が勉強で……。失敗しないようにしなきゃって」

「市場分析から仕入れ管理まででしょ。仕事の内容的には、僕が前にいた、倉庫ともちよっと関係あるかな」

「そうなんです。入社してすぐには営業をやってたんですけど、MDは希望の部署で。希望が叶ったって思いました。グループリーダーの北口さんもいますし、毎日が勉強ですけど」

「上司として、可能な限りサポートするよ」

精矢がそう言うのと、

「ありがとうございます！」

神崎さんは素直そうな顔でそう言った。

「私たち、同期なんです」

高木陽菜と顔を見合わせて、神崎が言った。

「陽菜のほうが二コ上ですけど入社が同期で……」

「美月は新卒だけど……私は転職組だからね。前の会社、ブラックすぎて二年で辞めちゃったから。二コ上」

高木陽菜が肩をすくめる。

「何やってたの？」

「小さな編集プロダクションにいたんです」

高木陽菜は、別の業界からの転職組だった。精矢は新卒からこの会社に入社したので、若くして別の会社から転職するという感覚があまりわからなかった。

「本を作ってたの？」

「そうだよね。陽菜は編集者だったんだよね」
神崎さんが補足してくれる。

「でも、激務で、本当にブラックで」

「陽菜、あの話、したら？」

「そうだね。あの話ね。上司が本当にクソだったんですよ……」
「うん」

「すみません。いまの上司を目の前にして」

「それは気にしないでいいよ」

上司云々より、若い女性がクソって、どうなんだ。

精矢はそちらのほうが気になった。

「その話っていうのは、原稿の遅いライターさんに悩まされてて、上司に相談したらね……」

そこで彼女は一呼吸置いた。

「なんて言われたと思います？」

「想像つかないな。代わりに書け、とか？」

そのくらいしか思い浮かばない。

「『あいつと寝ても原稿とってこい』って」

「うへえ、それはひどい」

「ひどいでしょう。ブラックどころか、セクハラですよね？」

横で神崎さんが、同情に満ちた目で高木陽菜を見つめている。

「それは……大変だったね」

そういうのが精一杯だった。

「でも勤めながら、『ザ・モーメント』に履歴書を送って、採用が決まって、『二週間後辞めまーす！』って。あれは最高に気持ちよかったです」

「引き留められたでしょ」

「引き留められましたよ」

「大変じゃなかった？」

「大変でしたよー！　そのうえ、勢いで、『明日から二週間後、有給休暇取りますから』って」

「修羅場よね」

神崎さんが汚いものを見るような目をした。

「それで新卒の美月たちに交じって、入社式を迎えて、丸三年経って、いまに至る、ってところですよ」

「それで仲が良いんだ？」

「はい。一緒に温泉旅行に行くくらい仲良しなんです」
今度は神崎さんが答える。

「冬に、群馬県の温泉に行ったんですよ。で、帰りに、まだほぼ群馬県のところでレンタカーのバッテリーが上がっちゃって……」

「ね、陽菜、あれヤバかったよね」

「J A F が来るまで、コートにくるまって、寒い車の中で三時間以上震えてたよね」

精矢は彼女たちが、上司である自分に対しては敬語で話すのに、友達同士ではタメ口で話すのを聞いて、そのギャップに、深い感慨を抱いていた。

「J A F、入っててよかったね」

精矢がそう言うと、

「それが……入ってなかったんですよ」

「そうそう、その場で入ったよね」

「レンタカーの会社には連絡しなかったんだ」

「そうなんですよ。私たち保険の安いプランにしちゃったから」

「やっぱ、保険は高い方に入るべきだよね！」

「そうそう！ そうしないと急にJ A Fに入る羽目になる！」

「あのあと車運転した？」

「してないよ。J A F入ったのにね」

二人は勝手に盛り上がっている。

こういう関係なんだな……。

立場が違う者への姿勢と、友達同士の姿勢、もちろん家族への姿勢もまた違うものだろう。彼女たちは精矢に見せる顔と違う顔をいくつも持っている。

彼女たちの「素」の部分に直に触れたような気がした。

ギャップがある。意外な部分を知る。精矢にとっては、こういう瞬間はたまらないものだった。

それに、見るからに明るくて、傍から見れば『陽キャ』そのものの高木陽菜にそんな過去があったとは。

人は見かけによらないな。精矢はその思いを強くした。

「課長、高木さんって、見かけによらず、苦勞してるでしょう。ねえ、本当に大変だったわね」

話に入らずに横で黙って聞いていた中条綾子がやっと口を開いた。

「そうなんです！ 実は私、苦勞人なんです」

自分で自分のことを苦勞人という人なんだ。

精矢が新鮮な印象を抱いていると、続いて、次の料理が運ばれてきた。
フォアグラだった。

「中村課長、フォアグラは苦手じゃありません？」

「僕は苦手な食べ物がないことが自慢の一つだから
適当に相槌を打つ。」

「でも、フォアグラなんて食べたことないな」

その言葉を遮るように、目の前の高木陽菜が跳ね上がった。

「うますぎてヤバイ！ フォアグラってめったに食べないけど最高ー！」

店内の照明が一段と明るくなるような笑顔で料理を頬張る姿は、精矢の緊張を和らげた。

「課長も遠慮せず召し上がってくださいね」

精矢は恐る恐るフォークを手に取り、フォアグラを一口。

「肉？ 脂身？ なにこれ……濃厚としか言いようがない」

思わず出た素直な感想に、周囲から笑いが起こる。

「ガチヨウやアヒルの肝臓ですよ」

中条綾子が助け舟を出す。

「僕が勤めていた倉庫は栃木の田舎だから」

精矢はつい昔話を始めてしまう。

「……こんなお洒落な料理なんてテレビでしか見たことなかったよ」
中条綾子がくすつと笑う。

彼女が注文したシャンパンの泡がグラスの中で踊り、まるでグラビアタレントが踊るように存在感を増していく。

「シャンパンって最初に注文することが多いけど、今でもいいですよ。だって歓迎会なんだし」

続いて提供されたサワラのペロンチーノを食べながら、精矢は内心驚いていた。

想像していたよりも、ずっと活気のある環境だ。その上、かつての現場の汗臭さとは異質の世界だ。

「なんか倉庫とは雰囲気がぜんぜん違いますね」

素直にそう言うと、中条が落ち着かせるような口調でまとめた。

「課長、緊張しないでくださいね。みんな期待しているんですからね」
彼女の香水の甘い香りが精矢の鼻をくすぐる。

メイン料理は肉だった。

「国産牛赤身のタリアータ・トリュフ風味です」

店員の説明を精矢はもはや聞いていない。

「こんな肉食べたことないよ。柔らかい」

思わず息を呑む。フォークを入れただけで肉がほぐれるような食感に驚いていた。

「物流センターのランチって、どんな感じなんですか？」

神崎さんが好奇心いっぱいの瞳で尋ねる。

「基本的には倉庫内の社員食堂の日替わりメニューか、カレーか、中華そば。それに、十キロ離れたところの惣菜屋が配達してくれる幕の内弁当。あとは現場で食べるカップ麺だね」

「カップ麺？」

「想像できない」

「私だったら三カ月持たないわ」

「でもお金かからなくていいかも」

女性社員たちが眉をひそめながらも、感想を言い合っている。

シャンパンを一口含んだ精矢はふと我に返り、周りを見渡した。

みんな清潔感があって、育ちの良さを持ちながらも、それぞれ個性的で知性を
感じさせる女性たち。そして目の前の洗練された料理。

「これから大変かもしれないが……まあ、なんとかなるか」

自嘲気味につぶやいた精矢の肩を、中条綾子がそっと叩いたあと、みんなに聞
こえるように言った。

「これから毎週月曜はここで打ち合わせしましょうか？」

冗談めかした提案に、一同から笑い声上がる。

都内の片隅のお洒落なダイニングバーで、中村精矢の新しい人生が静かに始ま
ろうとしていた。

四十人規模の歓迎会なので、店は貸し切り状態になっていた。

◇

◇

◇

度会彩（わたらいあや）は、盛り上がる歓迎会の様子を、少し離れた席で、冷
やかな視線で眺めていた。

横には同じEC事業部の同僚、黒澤由希がいる。

つまらなそうに自分のグラスを傾けて白ワインを飲み干す。

大学時代から東京で過ごす彼女は、仕事においては完璧主義者で、プライベートの充実ぶりでも社内で一目置かれていた。

仕事を離れると、彼女は人気のインスタグラマーという一面も持っている。

彼女は歓迎会にはそれほど興味を示さず、今はいかに映える写真を撮るかだけに興味を持っていた。

「ねえ由希？ 逆光の方がいいかな？ 寄った方がいいかな？ どう思う？」
彼女にとっては歓迎会の喧騒が他人事であるかのようにだ。

「どっちでもいいんじゃない？」

「真面目に答えて」

「さすがインフルエンサーは違うね」
動じずに茶化し続けるのは黒澤由希。

「茶化さないの。ブレちゃうでしょ！」

「多少ブレても誰も気づかないよ」

「気づくでしょ」

「はいはい」

黒澤由希は艶やかな黒髪をかき分けて、だるそうに相槌を打った。

「最近、プロバスケット選手や、ネットの討論番組に出る人とか露出多めの人がフォロワーになってくれたのよ。私はと、く、に、今が大事なの」

「あんた、仕事もその熱心さでやってよね」

「やってるじゃない。私はデジタルマーケティングっていう仕事を、仕事もプライベートも関係なくシームレスにやってるわけ」

「はいはい」

「『ザ・モーメント』の中の人として、メディアに顔出しまでしてやってるのよ」
「何が言いたいのか？」

「だから、せめて、時間的には完全に分けたいの」

「つまり？」

「定時で上がるの」

「なにそれ」

「お客様、追加のご注文はどうされますか？」
若い男性店員が、精矢に声をかける。彼の前にある空になったグラスに気づいたようだ。

「ああ、いや、僕はもう結構です。料理、とても美味しかったです」
精矢は優しい口調で応じる。

「ありがとうございます！」
アルバイト青年が元氣よく答え、他のテーブルへ移動していった。

「課長ってけっこう人当たりがいいですよね」

中条綾子はそのやりとりを見て言った。

「いやいや」と、精矢は照れくさそうに頭をかく。

「単に田舎者だから礼儀正しいだけですよ」

「そこがいいんじゃないですかね？」

中条綾子がフォローをする。

離れたところで度会彩がつぶやいている。

「まあでも、私たちにとって大事なものは、やりやすい上司なのかどうか。ちゃんと成果を出せるのかしら。最初の三カ月は、お手並み拝見ね」

「あんたって、相変わらず上から目線ね」

黒澤が反応する。

「でも一応、自己紹介に行っておきましょう」

その後、スタイルの良い二人の女性社員が精矢のもとで談笑している様子が見られた。

歓迎会が進むにつれて各テーブル間での交流も増え始めた。異なる部署同士がお互いの仕事を理解し合い、新たな繋がりができていく様子に、精矢は密かに満足感を覚えていた。

「倉庫とオフィスじゃ世界が違うと思ってたけど……案外同じところもあるんだな」

そう呟きながら、彼は次々と出会う人々に笑顔で応じていった。

最後のドルチェが提供され、コースのメニューがすべて終了した後も、飲み物だけは何回も注文された。十一時を過ぎても、ダイニングバーからは明るい笑い声が漏れ続けていた。

精矢にとって、今夜は単なる歓迎会以上の価値ある一夜となった予感がした。

夜の十二時近くになって都内の賃貸マンションに帰宅したら妻がまだ起きていた。

「栃木の田舎から本社に異動と聞いてどうなることかと思ったけど、いい人ばかりで、なんとかなりそうだよ」

「よかったね。何食べさせてもらったの？」

「なんか食べたことないおしゃれな料理ばかりで」

「へえ」

「なのにおいしいんだよ」

妻とは栃木に勤務していた時に倉庫の同僚から紹介されてそのまま結婚した。その同僚の恋人の女友達という月並みなパターンだった。

「お風呂、みんな入ったから。終わったら栓、抜いてきてね」

「はいはい」

子供はもう寝ていた。さすがに中学生にもなると、「パパ」「パパ」ではない。明日からまた仕事だ。本格的に始まるのだ。

風呂を出て、髪をドライヤーで乾かすと、精矢は心地のよい酔いがまだ残る体で布団に潜り込んだ。

第二章 新米課長

最初の一週間は、嵐のように過ぎ去った。

精矢はマイクロソフトのアプリをはじめとして一通りパソコンのことはわかっているつもりだった。もちろん倉庫で使用していたシステムのことも熟知していた。

ただE C事業部で日常的に使用するソフトウェアは初めて触れるものだったし、会議の準備をするだけでも大変だった。

精矢にとって、課長補佐の中条綾子という女性は、なかなか難攻不落な存在だった。

ソフトのことで理解できないところを質問すると、「それは前に説明したと思うんですけど」とわざわざ嫌味っぽいひと言を残され、内心、そんなことを付け加える暇があったらさっさと教えてくれよ、と思ったりした。

歓迎会のときには、年下ながら、姉御肌で、面倒見の良さが感じられる存在だと思ったが、仕事においては当然ながら厳しさを備えていたのだ。

既婚、子供なし。そして課長補佐。新卒で就職した銀行を二年で辞めて、『ザ・モメント』にやってきた。

営業部の経験もあり、地方勤務も経験したバリバリの叩き上げだ。

そしてE C 事業部発足に伴い異動。そして現在は課長補佐。つまり、自分の右腕となる人材だ。

歓迎会で隣に座ったことで、精矢は彼女の詳細なプロフィールを把握していた。ただ、豊満な胸が近くに来ると、ご主人との夜の生活を想像せずにはいられなかった。

「中村課長、こちらのデータ整理をお願いします。今日中に終わらせなければなりませんので」

彼女が差し出してくる「宿題」は、いつも決まって膨大だ。

「わかりました」と答えながらも、内心では胃がキリキリと痛むのを感じていた。彼女を前にすると、時々、無意識に敬語が出てしまうのだった。

彼女の指示は明確だが容赦がない。だが、それは単なる厳しさではなく、彼女なりの「効率的な業務遂行」と「部署全体のレベル向上」という強い意志の表れだと理解しようと努力していた。

「……至急取り掛かります」

背筋を伸ばして答えると、中条は満足げに頷いた。その際、ふとした瞬間に香水だろうか、甘く上品な香りが微かに漂ってくることもある。

倉庫時代には縁のなかったタイプの、デキる女性社員。

彼女の前では、新米課長である自分がいかに未熟かを突きつけられるような感覚さえ覚えた。

本当に……俺の方が課長でいいんだろうか……？

一カ月が経った。

ようやく慣れてきた。

「課長、商品ページのUI変更に伴う社内コンセンサスの進捗管理ですが、今週金曜日の午前中までにお願ひできますか？　クライアントから急かされています。ええ、もちろん課長なら対応可能ですよね？」

有無を言わせぬ笑顔でプレッシャーをかけてくる中条。

「……はいっ！」

威勢よく返事をするのが精一杯だった。冷や汗が背中を伝うのがわかる。プログラムはともかく、部署間の折衝なら日本語だ。何とかなるだろう。

「で、いまは何で詰まってるんですか？　しょうがないですねえ」

呆れたように言いながらも、中条は精矢の画面を覗き込んできた。近づく、あの甘い香りがより強く鼻腔をくすぐる。

そして、デスクチェアの背もたれに寄りかかる体勢になった彼女の胸元が、オフィスカジュアルのブラウス越しに自己主張していて、精矢は慌てて視線を逸らした。

また想像してしまう。

「……この部分は、ここをこう変更すればうまくいきますよ。あと、こっちの優先順序も見直してみてください。何度か試行錯誤する必要があるかもしれません……まあ、課長なら大丈夫でしょう」

最後の一言は少し嫌味が入った発言だったが、助言自体は真摯なものだった。精矢は感謝しながらも、「わかりました」と素直に答える。

彼女の前では虚勢を張ってもすぐに見抜かれてしまう。

彼女を味方にしていかなければいけない。

それに……調教のし甲斐があるぞ。

しかし、調教なんて言ったらセクハラそのものだな。現に今調教されているのも自分のほうなんだから。

中条とのやり取りは緊張感のあるものだったが、彼女のおかげで少しずつではあるが確実に知識が増えていることを精矢は実感していた。

物流センターの倉庫での体力勝負とはまるで違う知的な領域での競争。慣れない環境は過酷だったが、同時に得るものも多かった。

中条綾子みたいにスマートにこなせるようになっていたいものだな。

休憩時間に一人でコーヒーを啜りながら呟く。

知識量もさることながら、何よりも彼女の持つ、有無を言わさぬオーラと美しさに圧倒されていた。

そして、たまに垣間見える鋭い眼光に射竦められると、まるで自分が幼稚園児にでもなったかのような気分になるのだった。

第三章 神崎美月

新米課長の中村精矢にとって二カ月がたった。

精矢にはある嗜好があった。それは、まるで古傷のように年季の入った性癖だった。

このオフィスに新任課長として異動して以来、二カ月がたった六月のある日。精矢はその日、オフィス全体が静まり返る時間に一人、課長席に残っていた。

精矢の性癖。

それは靴の匂いに欲情するというものだった。

もちろん自分の靴ではない。自分の靴を好んで嗅ぎたい人なんて誰もいないだろう。

しかし、だからといって、他人の靴を嗅ぐのは正常なことなのか。時々、精矢は自問自答する。

この新しい、キラキラした女性が集まる職場で、女性社員たちの靴の匂いを確かめてみたい。

果たしてそれはどんな匂いなのか？

しかし自分はなぜ女の靴の匂いなんかを嗅ぎたいんだろう。

精矢は、性的な好奇心を、心の中で言葉にしてみる。

管理職として、自分には知る権利があるはずだ。今の自分にとって、それは「マネジメント」だ。

無茶苦茶な論理だな。

課員の女性たちだって、靴の匂いまで、上司の「知る権利」の対象になっているなんて思わないだろうか。

でも、いつ実行するか。

まだだ。

信頼を得られるまではおとなしくしていなければ。

精矢は、その衝動をこの二カ月間、我慢してきた。心の中に留め置き、熟成させていた。

しかしそろそろ、制御できないものとなっていた。

秘めた欲求は心の奥底には抱え込めないくらいに膨張していた。

「ふう……」

深く息を吐き出しながら、精矢は顔を上げた。

もう十五分も同じ姿勢を保っていた。

床に膝をつき、若い女性が、内勤時の上履きとして使用しているオフィスサンダルを抱えるようにして鼻を近づけていたのだ。

「ついにやってしまった」

自嘲気味に呟く。

三十八歳。

妻帯者でもある。

この異常な嗜好は決して誰にも打ち明けられない。EC事業部付課長という肩書きさえ、何の意味もない。

オフィスは照明がほとんど落とされ、精矢の部署のデスク周辺だけが明かりをつけている状況だった。

その明かりに照らされ、精矢の姿が床に短い影を落としていた。社員はすでに全員帰宅している。今日も残業を装って最後まで残ったのは、このためだ。

「神崎さんの靴だ……」

彼女のデスクの下。奥の方にきちんと左右に並べられた目の前のオフィスサンダルは、神崎美月のものだ。

入社四年目だが、大学生と言ってもいいような、まだどこか初々しさが残る雰囲気的女性。なのに仕事ではまったく危ないところもなく、最初から最後まで任せられる人材。

自分の歓迎会で、正面近くに座ってくれた彼女の靴がすぐそこにある。その靴は、今まさに自分の嗅覚にさらされようとしている。

彼女の社内履きは、マットな質感を放つ、ブラックレザー調の人工皮革のオフィスサンダルで、先端の三角が丸くなったようなデザインだ。

足首の部分のストラップは面ファスナーで、きっちりと締まるようになってい
る。

精矢は彼女が面ファスナーを締めることで始業のスイッチを入れる姿を想像し
た。

サイズは二十三・五センチ。

精矢は立ち上がり、改めて、窓際に歩み寄った。眼下には駅へ向かう人々の流
れが見える。その中に神崎の姿はない。彼女は定時すぐにタイムカードを押して
いたので、もう家に着いているだろう。

「俺はいったい何をしているんだ」

頭では理解している。これは異常だ。不適切だ。法的には問題にならないかも
しれないが、倫理的問題がある。

いや、法的にも問題がないと言い切れるのだろうか。傷つけたり、盗んだりし
なければ、問題にならないのだろうか。

ただ――。

「止められないんだよな……」

再び彼女の靴の前に跪いた。今度は右足の方。

靴を嗅ぐという行為——それは単なる悪戯に過ぎないのか、それとも何かしら、心の根源からの欲求の表れなのか。

精矢は靴の踵をゆつくりと指で撫でた。冷たい人工皮革の感触。それが次第に温もりを取り戻したかのように思えた。

神崎さんの靴。彼女が一日中履いていた靴。

「これは犯罪ではない」

彼は自分に言い聞かせるように呟いた。

もちろん許される行為ではない。不快に思う人もいるだろう。しかし法的には何も違反していない。少なくとも現時点では。

定時後の一人残業。誰もいないオフィス。密かな「クン活」の時間。

華奢な身体に清潔感のあるファッションで決め、いつもきちんと整えられたロングボブのヘアスタイル。髪色には明るめのブラウンを入れている。

外回りではないため、いつもスーツを着ているわけではないが、絵にかいたようなオフィスカジュアルの装い。

背筋を伸ばして歩く姿は、凛とした雰囲気を持ち、それでいて柔らかな笑顔が人を惹きつける。

「中村課長、来週のプレゼン資料です。ご意見聞かせてください」

そう言って彼女が差し出す書類は常に完璧に整理されている。上司からの指示には素早く正確に対応する。真面目で誠実な性格は誰からも評価されている。

会話の際、彼女は常に相手の目を見て聞き、要点を的確に把握して返答する。その真摯な態度には尊敬の念しか湧かないはずなのに――。

いま自分は、そんな神崎さんの靴の匂いを嗅いでいる。

「女の子なのに……若いだけあって。……やっぱり、けっこう汗の匂いが強いな」

精矢は両手に持った神崎の靴に交互に鼻を近づけた。

素材由来である化学製品のビニール臭のような匂いが基底にあるが、嗅覚に全神経を集中させるように注意深く嗅いでいくと、確かに鼻の奥を刺激するような、より生々しい、酸っぱいような、汗の匂い。

そして二つの足の匂いさえ微妙に異なることを発見する。

右の方が少しばかり匂うな。

（ここまでお読みいただき、ありがとうございます。体験版はここまでとなります。中村精矢の「クン活」は、まだ始まったばかりです。続きは製品版でお楽しみください）